

我々ができることはやるうじやないか

三田寺玲子さん(七十代)

三田寺正志さん(七十代)

自然環境の変化

〔正志さん〕スズメやヘビが減っています。それを餌とする小動物が減っているんですね。水田をやる時は、シラサギが来るんですよ。それから、稲刈りの時にも随分来ます。半分しか農業に携わっていないですけども、季節の移ろいを感じますよね。田舎の良い所だと思います。

シマヘビがいなくなりました。マムシとかいうのは、昔から少なかったんですけど、ほぼ見ないね。カエルもいない、鳴き声も少なくなりました。ヤマカガシとかも少なくなりましたね。ツバメとかキジとかシラサギとかは増えているけど、スズメが少なくなりました。昔はそれこそ電線にずっと並んでいましたよね。カラスが増えたからですかね。フクロウの鳴き声はいまだに、聞きますね。ああいう猛禽類がいるっていうのは、食物連鎖が健全なんだとは思っています。虫は見えていないです。

地域の子ども会活動について

〔正志さん〕子どもに関わる活動、いわゆる子ども会が盛んだったんですよ。地域が一丸となって活動に参加してくれたんですよ。ここ二十年とか十五年、活動が下火になってしまっただけで、何とかしないといけないなと思っていました。藤井地区は存続していますけども、飯富地区全体としては解散しちゃったんですよ。子どもたちは保護者の承諾がないといういろいろアプロー

チをしても参加してくれないということもあってですね。ジレンマだなと思っています。

子ども会活動衰退の背景

〔正志さん〕子どもの数が少なくなると、保護者の負担が相対的に増えるんでしょうね。それで、活動できないことを理由に退会するんですよ。「飯富子ども育成連合会」っていうのがあったんですけど、それが解散ですね。実践会の方で、保護者に代わって我々ができることがあるんだったら、肩代わりしようじゃないかという動きをここ一・二年見せてます。コロナによってどうなるか分かりませんが、一つ事業をやろうということでは進めています。とにかくここ二、三年は、事業を計画しても、二言目にはコロナだつて言われるんですよ。

今の子どもたちは寂しいんじゃないかって思いますよね。二十年前はキャンプなんかに行ったりしました。昔は盛んだったんです。今は、保護者が共働きなんですよね。だから、子ども会にさける時間がないのは分かります。社会全体がそういうふうだから、しょうがないですよ。

若い世代について

〔正志さん〕これからの日本を背負って立つ人が、彼らに言い方悪いですけど、稼いでもらわなくちゃならないんだもん。学校には、とにかく勉強、学力向上させてくれと言います。それ以外の部分で、我々ができることはやるうじやないかと思っています。多分、若い人たちは、海外に出ていくとか、冒険するとかそういうことがないかと個人的には思っているんですが。

地域のつながりについて

〔正志さん〕地域のつながりが希薄になりましたね。昔はそれが煩わしいというのもありましたけど、今はないですね。隣の人に関心を持たないというのが、田舎でも徐々にそうなりつつありますね。皆さん、忙しいんでしょうね。我々ができることと言ったら、事業に積極的に参加してもらうような環境づくりや雰囲気づくり、声掛けとかそういう活動をするくらいしか思いつかないですね。とにかく参加してもらうことを最優先で活動しているんですけどもね：コロナでイベント中止になっちゃったから、代わりに親子ドローン教室っていうのをやりましたよ。三月かな。四十三名かな。結構盛況だったんですけど。できないながらも、何か模索している、もがいているというんですかね。地域のつながりによって楽しみだし、励みにもなりますよ。

地域の災害について

〔玲子さん〕ここは、地震も水害も強いんですよ。十一年前の震災の時は、電気が止まったけども、すぐ次の日に電気は再開しました。根本町の通りは、波打ってましたよね。塀とかが倒れちゃってるんじゃないかって思いました。水害の時は、神社の下のちよつと下のところまで水がきちゃって、市民センターまで行ける状態ではなかった。

〔正志さん〕水害は毎年あってもおかしくない気象状況ですね。水害ってのは、水害になるところは決まっていますからね。

〔玲子さん〕専業で農家やっている方は、すごい心配してますね。作物がね。

水害について

〈正志さん〉降り始めるとずっと続きますよね。二・三日続くような印象なんですけど、それは以前とは違うと思います。

〈玲子さん〉昭和六十一年の時は、神社の下の方なんですけど、船でみんな逃げたんですけど。その時はすごかったんですよね。その時は、集落センターでみんなでおにぎりを作って炊き出しとかしたんですけどね。

〈正志さん〉そういうのがあって対策されて、藤井川の逆水門とかなったんですけど、それだから今の現状で耐えているんだと思うんですけども。藤井川の堤防、回収して嵩上げしちゃったんですよね。その効果がどうかっていうのは、今年の台風シーズンとかで試されているのかもしれないけど。

今後の子どもたちに向けての活動について

〈正志さん〉この夏休み、グラウンドで小学生たちでキャンプできないかなと思ってんだけどね。確かに、夜寝る時、暑いかもしれないけど、子どもらはそんなこと物ともしないんじゃないかなって。川をせき止めて、アユの手づかみ大会があったんですよ。それが評判が良くてね、企画して良かったなと今でも思っていますよ。親の反対がなければ、進めるのはいくらでも進めたいと思っています。

子ども神輿の写真から派生して

〈正志さん〉子どもが神輿を担いできたら、地域の方がじっとしていられないんですよね。藤井町を一周したんです。身寄りのない高齢者のお宅とかはね、若い子どもの顔が見えるだけ

で、大きな喜びですよ。生きててよかったという、大きさに言えばそんな感じだと思いますよ。そういうことを全体で共有したい、そういう社会を目指していきたいと思えますね。できることから、できる範囲でやるっていうことですね。

子ども会のあり方について

〈玲子さん〉私が子どもの頃は、一つの単位ごとに子ども会がありまして、子ども自身で廃品回収をしたりして、子ども会の費用を捻出したり、子どもたちでやっていた。今は、逆にほぼ親が企画して、それに子どもたちが参加するっていうのを見て、それでいいのかなって思います。本当に親は忙しかったですよ。ポートボールとか、ドッジボールとかの付き添いとか、大変でした。時代の流れもありますので、しょうがないのかなとは思いますが。

〈正志さん〉年代を超えて、子どもたちがつながることはないんじゃないかな。そういう機会が少ないです。横のつながりしかない、縦のつながりはやっぱり子ども会とかそういう団体だと思えますよ。五、六年生がまとめて、低学年の面倒を見ながら、一緒にやるというよ

うなやり方で薄れてきたんじゃないですかね。



平成初期の子ども会活動